

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520257

研究課題名（和文） 移動／定住／家族——21 世紀に向けてフォークナー文学を拓く

研究課題名（英文） Displacement, Community, Family: New Approaches to Faulkner's Texts in the 21st Century

研究代表者 田中 敬子（Tanaka Takako）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：70197440

研究成果の概要（和文）：本研究は、W・フォークナーがアメリカ南部の町を舞台とした壮大なサーガを創造しながら、共同体に定住している特定の家系の年代記のみならず、次第に放浪者、移動するマイノリティへと関心を広げていることに注目した。彼が定住者とノマドの間の軌轢を問い、父権社会への批判を強め、そのような社会の閉塞性を打開する方法として、伝統的家族の解体と流動的、雑種的家族の可能性を模索したことを示し、21 世紀のグローバルで越境的視点からのフォークナー読解を提案した。

研究成果の概要（英文）：This study starts with the recognition that William Faulkner not only created the Yoknapatawpha Saga based on his hometown in the American South, but he realized the importance of the nomads and the minorities who constantly moved in and out of community. The study demonstrates that Faulkner examines the struggle between the community and the nomads, and that he goes so far as to decompose the traditional family. With the help of border-crossing theory, the study shows that Faulkner proposes a new type of nomadic family that consists of non-blood-related members so as to challenge the patriarchal society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英米文学・文学論・フォークナー・移動・定住・家族

1. 研究開始当初の背景

フォークナーは、1950～60 年代には共同体重視の南部作家や実験的モダニストとして評価を得たが、その後ジェンダー研究やポストモダニズムからも注目され、ポストコロニアリズムにおいて

は主に中後期作品を評価される形で研究・批評が推移してきた。

特に 1990 年代からは、南北アメリカ大陸植民地の歴史を視野に納めてアメリカ南部を語る作家として、そのテキストを検証しなおす作業が始まっている。

それは、アーキペラゴ論、クレオール化論を展開してカリブ海文学における交通の重要性を説くエドゥアール・グリッサンによるフォークナー論 (*Faulkner, Mississippi*, 1996, 1999) をはじめとして、*Faulkner in America: Faulkner and Yoknapatawpha 1998* (2001)、南部と新大陸植民地の関係を論じた *Look Away!: The U.S. South in New World Studies* (2004)などに成果がでてきている。その流れの中で、フォークナーのみならず中南米を舞台とした作家たちの文学までを視野に、異人種混交の家族を分析したジョージ・B・ハンドレイの *Postslavery Literatures in the Americas: Family Portraits in Black and White* は、本研究にも大きな示唆を与えた。

本研究は基本的にこれら 1990 年代来のクレオール論やポストコロニアリズム論、及びフォークナー研究の流れを汲む。なお、異端、漂流と社会の関係については、主に G・ドゥルーズの『マイナー文学』、マイノリティの主流社会に対する関係はホミ・バーバの『文化の場所』、グロリア・アンサルドゥアの *Borderlands/La Frontera*、父権制家族に対する挑戦についてはジュディス・バトラーの『アンティゴネーの主張』などジェンダー研究をおもに理論的基盤とした。

2. 研究の目的

21 世紀において文学は、国家枠をはみだしグローバル化に翻弄される亡命者、難民、移民、マイノリティなど、個人のアイデンティティの重層化やボーダーランド体験の重要性が増している。またポストエスニックの時代と言われる現在、血縁、地縁に頼らない家族のあり方は漂流、越境を繰り返す人生とともに、国民国家中心の価値観を打開する緒口として注目に値する。20 世紀アメリカ合衆国の作家ウィリアム・フォークナーは、モダニスト、またはアメリカ南部の人種問題やコミュニティの歴史に焦点を当てたヒューマニストといった一般的理解とは異なり、常に放浪者や共同体の異端者に注意を向けてきた。

本研究では、彼のテキストを定住者とそこから疎外された異端者、そして漂流者の関係から分析し、定住と漂流の間で父権社会の家族像の変化を考察する。父権制家族の解体、血縁と異なる家族関係の形成、個人や疑似家族の放浪や流動性が、新たな世界文学が模索する、国民国家を超えた関係性、異人種間の連帯、雑

種の共生に示唆を与えることを明らかにする。

3. 研究の方法

「移動」と「定住」について、ドゥルーズの『マイナー文学』を基礎として、父権社会に対して「漂流」がもつ抵抗の意義を確認したのち、伝統的な家族概念と国民国家の基礎単位としての父権家族制度の密接な関係を再確認しておく。それをもとにフォークナーの中、後期作品でノマド的登場人物がどのような重要性を占めているか、彼らが既存の主流社会にとってどのような脅威となっているかを検証する。その際、比較として、フォークナーから多大な文学的影響を受けた日本作家、中上健次の作品に登場するノマド的人物も参照する。さらにフォークナーが描くマイノリティや漂流者、異人種が形成する擬似家族もしくは小集団が、父権社会の解体につながる提案として有効かどうか考察する。最終目的は、フォークナー文学における家族の形の変遷とその意義を、南部の村落共同体を超えてアメリカ合衆国、さらにはグローバルな規模で探ることである。

4. 研究成果

2010 年は、フォークナーの中期を代表する作品の一つである『八月の光』が、共同体と 4 人の放浪者である主要登場人物のあいだの葛藤であることに注目し、混血かもしれないジョー・クリスマスと町の異端者ジョアンナ・バーデンを中心に考察した。放浪する男性と共同体から異端視される女性の関係は、中上健次の短編「不死」にもある。これらのマイノリティ女性に付される神話的な魔性とそれに惹かれつつ反発する放浪者の男性の関係には、神話、伝説に見られる共同体の排他性とスケープゴートとしての異端者、父権制社会への従属と反発の絡み合いなど、多くの興味深い共通点があることが判明した。それについては「〈危険な女〉と放浪する主人公——フォークナーの『八月の光』と中上健次の「不死」——」という論文として発表している

ついで 2011 年はフォークナーの後期作品『寓話』で、第 1 次世界大戦を舞台に出身地も民族も異なる小部隊の反乱を描くこの物語に、様々な小集団が重複しつつ存在することに注目した。この小説は壮大な失敗作と考えられている。しかし戦争放棄を唱える反乱部隊の若き指導者である伍長が、国民国家の父権制を象徴する総司令官の私生児である一

方、伍長の家族は血縁で結ばれているわけではないこと、軍隊の階級制とは別に兵隊たちのあいだでフリーメイソンの結束が機能していること、敵味方に分かれるはずの英独仏の将軍たちが結託することなど、この小説には集団を結成する境界が多種類存在し、テキストの文体と合わせて境界をなし崩し、重層化する力を評価した。この考証の成果は、土屋勝彦編『反響する文学』のなかの「フォークナーの『寓話』と越境」として発表している。

また2011年11月には、シドニーのニューサウスウェールズ大学において Center for Modernism Studies in Australia 主催で行われた *Faulkner in the Media Ecology* という学会にて “From Sanctuary to Requiem for a Nun: Temple and Caddy” という題目で研究発表を行った。これはフォークナーの後期小説『尼僧への鎮魂歌』を中心に、『サンクチュアリ』のヒロインであった temple・ドレイクがその後結婚して築いた伝統的家族の危機を考察している。templeには父権制社会から逸脱する欲望があり、彼女を父権制社会の中に従属させようとする弁護士スティーヴンズとの葛藤、templeの家出を阻止しようとする黒人女性ナンシー・マニゴウ自身の反逆性、さらに彼女を通じて『響きと怒り』や「付録——コンプソン一族」に登場するキャディ・コンプソンと temple の関連性を考察した。そこで結論は、女性たちの人種を超えた連帯の可能性にフォークナーが新しい家族のあり方を見ているのではないか、また『尼僧への鎮魂歌』という小説が劇と小説と叙事詩的語りのジャンル越境を行っていることにも定形枠にはめられない表現形態への挑戦がある、ということである。

上記の研究発表については、2012年にさらに『尼僧への鎮魂歌』に見られる1930年代大恐慌に対する連邦政府の社会主義的政策 WPA プロジェクトに対するフォークナーの批判、全体主義的な傾向への危機感、地方の独自性への干渉批判を読み取り、その点を補強して “The Form of Remembrance in Faulkner’s Late Years: Requiem for a Nun” として紀要論文に掲載した。

以上、フォークナーの中期から後期の作品を中心に、放浪者と共同体の緊張関係、伝統的家族の崩壊、さらに血縁のない疑似家族、異人種間の女性たちの連帯の可能性が、ヨクナパトーフア・サーガの家族物語と同時に存在していることを示した。そしてフォークナーの家族観

の変化が彼の越境的視点の広がりとなり、国民国家の呪縛の突破口となっていることを明らかにした。結論として、ノーベル賞受賞に至ったフォークナーが、南部共同体とアメリカ合衆国のみならず世界規模で、全体主義的傾向を持つ国家とそこから逸脱しようとする放浪者たちの移動の対決について、柔軟性のある境界によって形作られた小集団を軸に検討していることを証明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① “The Form of Remembrance in Faulkner’s Late Years: Requiem for a Nun”、田中敬子、『人間文化研究』、査読無、18号、2012年12月、135-149
- ② 「<危険な女>と放浪する主人公——フォークナーの『八月の光』と中上健次の「不死」——」田中敬子 『人間文化研究』、査読無、13号、2010年6月、85-96

[学会発表] (計2件)

- ① *Faulkner in the Media Ecology*
“From Sanctuary to Requiem for a Nun: Temple and Caddy” 田中敬子、2011年11月25日
University of New South Wales, Sydney,
Center for Modernism Studies in Australia 主催

[図書] (計1件)

- ① 「フォークナーの『寓話』と越境」、田中敬子、土屋勝彦編『反響する文学』、風媒社、2011年3月、90-120

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 敬子 (Takako Tanaka)

名古屋市立大学・大学院・人間文化研究
科・教授

研究者番号：70197440

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：